

第1章 旧高野家住宅の概要

岩手県奥州市水沢字大畑小路に所在する旧高野家住宅には、国史跡・高野長英旧宅、離れ座敷の古稀庵、これらをつなぐ新座敷の三棟が建つ。

江戸時代の蘭学者・高野長英（文化元年・一八〇四〜嘉永三年・一八五〇）は水沢伊達家家臣後藤実慶の後妻・美也（高野玄斎の妹）の第二子として誕生した。文化九年（一八一二）、数え年九歳のときに父が亡くなり、母とともに高野家にもどり、時期は明らかでないが伯父の高野玄斎の養子となった。玄斎（高野家八代、長英は九代にあたる）は杉田玄白の門人であり、水沢伊達家に医をもって仕えた家臣であった。文政三年（一八二〇）、長英は十七歳で蘭学を学ぶため江戸へ上り、文政八年（一八二五）には二十二歳で長崎の鳴滝塾へ入塾し、シーボルトのもとで西洋医学を学んでいる。天保九年（一八三八）に外交政策を提言するため著した『夢物語』が幕政批判の咎を受け、蛭社の獄で投獄されるも脱獄。潜伏中も翻訳を続けたが、嘉永三年（一八五〇）に捉えられ自害した。後に復権し、正四位を追贈されている。

高野長英が文化文政期を過ごした高野家の遺構が現存する貴重性から、昭和八年（一九三三）に高野長英旧宅が国史跡に指定されている。その史跡指定申請書には（巻末資料参照）「明治九年ノ改築ニヨリ屋根其ノ他ハ高野長英ノ居住セシ当時ノ原状ヲ詳ニスルコト能ハザルモ階下八畳六畳ノ二室ハ長英ノ居室ニシテ旧構ヲヨク存セリ」とある。また、史跡指定申請書に記載された高野長運の説明によれば、旧宅は高野家七代であり高野家医家の開祖である元端（寛保元年・一七四一生まれ）が天明年間頃に建築し、安政六年（一八五九）三月十三日に柳町から全町に広がった「三蔵火事」に際しても、類焼を免れたとし、長英書簡とともに、旧宅における長英居住の事実を説いている。

古稀庵は高野家十四代・長経が父である十三代・長運の古稀を祝って建築した離れ座敷である。高野長運は長英の復権を願い、『高野長英傳』を著した人物である。史跡指定申請書に旧宅の来歴が長運により詳述されていることから、史跡指定に長運が積極的に関与したことがうかがえる。

古稀庵は棟札が現存し、建築年と関係者が特定される点でも貴重である。すなわち昭和六年（一九三一）六月七日に上棟式、建築顧問に佐藤連、設計監督に岡村潤治、棟梁は仙台市の河合好藏、橋本正雄、土工は小原福治、左官は熊谷由吉という関係者が判明する。なお岡村潤治は東北帝国大学営繕の建築技師をつとめた人物であった。この時代に建築家が個人住宅を設計すること自体が珍しく、この岡村の事蹟については本書で後述する。

さらに、昭和十六年（一九四一）頃に旧宅と古稀庵を接続するかたちで新座敷が建築された（長経の娘・平山きを聞き取り資料より）。新座敷には高野長経が住んだという。

なお、国史跡・高野長英旧宅とその底地は平成二一年度の国庫補助事業により、奥州市が購入し、平成二年二月一六日に建物、同年三月四日に土地の移転登記が完了している。さらに、同年二月一三日付で史跡・高野長英旧宅を除く敷地内の全ての建造物（古稀庵、新座敷、瑞臈文庫、味噌小屋、板倉）が奥州市に寄贈された。

その後、地域活性化・きめ細やかな臨時交付金により、平成二二〜二三年にかけて、古稀庵と新座敷の修繕工事、平成二四〜二五年には、国庫補助による史跡・高野長英旧宅災害復旧（保存修理）工事が実施された。

こうした保存整備事業を経て、現在では定期的に一般公開され、広く市民に歴史的建造物の価値を伝える建物として活用されている。

今回、この旧高野家住宅全体の建造物としての価値を明かすため、文化財調査を実施した。



図1 高野長英旧宅外観



図2 古稀庵玄関の外観

第2章 歴史的建造物の特徴

1 立地および配置について

旧高野家住宅の敷地は、大畑小路に西面して位置する（図3）。敷地西側に門をひらき、板塀が囲む。西側から東側へ高野長英旧宅、新座敷、古稀庵の三棟がコの字形に配置される。敷地の北西隅には瑞阜文庫（昭和七年・一九三二）がたち、高野長英旧宅の北側に味噌小屋がある。また古稀庵の裏手、敷地北東側には板倉がある。敷地の南側は、旧高野医院の跡地であり、現在は高野家の住宅となっている。古稀庵の南および東、新座敷の南、高野長英旧宅の通り側（西）にはそれぞれ鑑賞庭園が整備されている。

また当敷地の北側には、重要文化財の旧高橋家住宅が隣り合う。

2 各棟の特徴

（1）高野長英旧宅

切妻造妻入りの二階建である。当初は寄棟造茅葺きの平家建の住宅を、前述のように明治九年（一八七六）に二階建へ増築したものである（図4）。

南側中央に玄関を設けて、北西側に床をもつ八畳の上座敷がある。この座敷に続き間のかたちで一〇畳の次座敷が設けられる。玄関の間の北側奥に茶の間（常居）、その東側に台所、また玄関の間の東側に六畳の広さをもつ部屋がある。座敷の西側と常居の北側には幅半間の縁がまわる。なお柱割の一間は六尺三寸で計画されている。

昭和八年（一九三三）の史跡指定では、改築が多いものの高野長英時代の八畳および六畳の居室が現存するとされた。実際、次座敷の西側から一間奥の柱内側をみると、鴨居の痕跡をとどめ、建具の圧痕もみられる。かつこの柱の通り側（西側）に風雨にさらされた風化がある。よって、現在一〇畳の

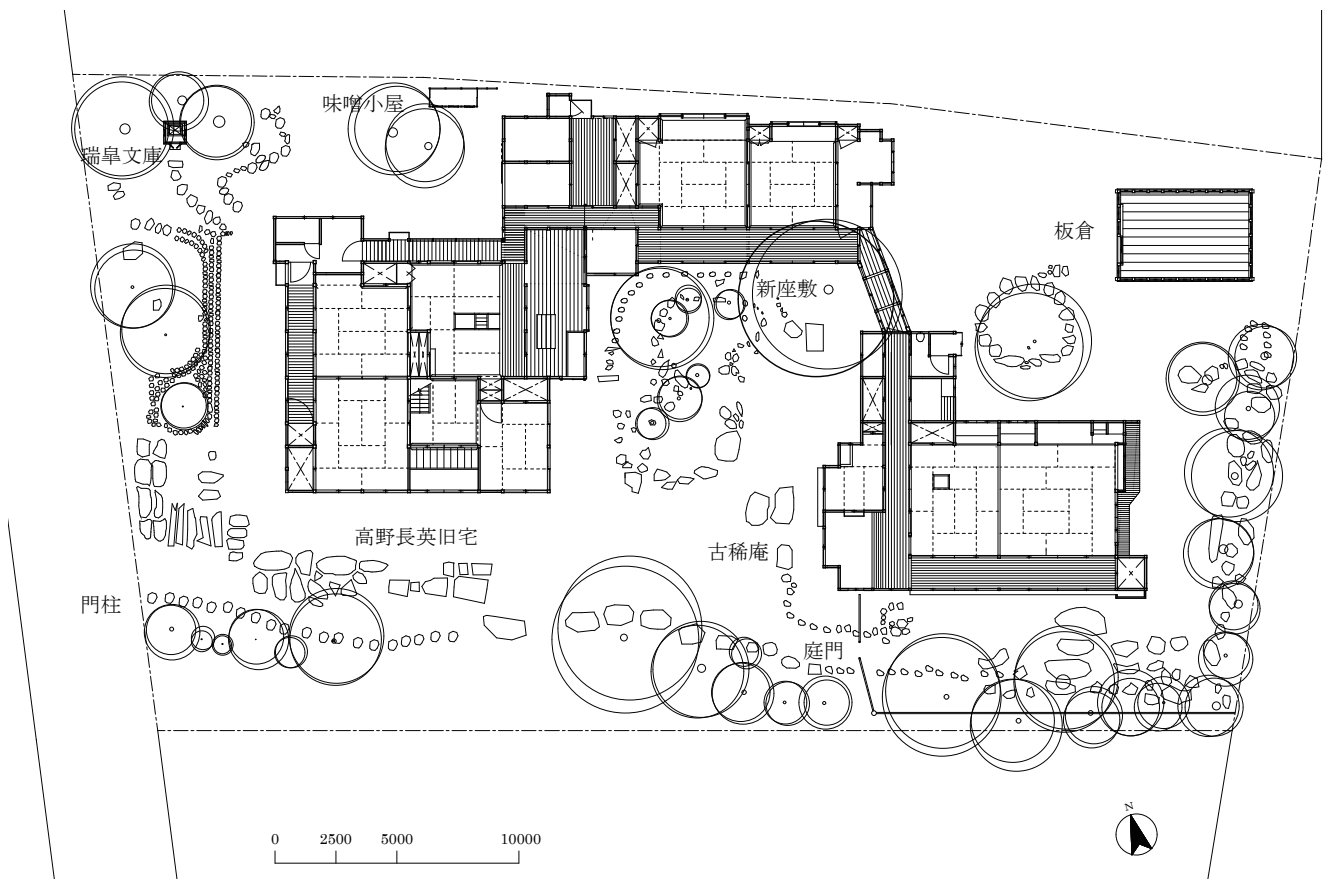


図3 旧高野家住宅配置図

広さをもつ次座敷は当初、六畳の広さだった。すなわち改築が多いといえども、中央に玄関をもち、その奥に茶の間（常居）を設け、その左右に座敷部と台所部を配置する当地の武家住宅の構成をとどめている。

八畳の上座敷は通り側（庭側）に縁をつけ、一間幅の床を設けて、その脇は襖をたてて収納とし、内側の一部には茶の間側からつくりつけられた仏壇が設置される（図5）。床部分のみ、灰色の砂壁で仕上げる。床柱は杉皮付き丸太とし、部屋に長押をまわす。棹縁天井として、次座敷との境に箴欄間を設ける。全体として室内は比較的簡素な意匠である。二階建への改築時に、上座敷の東面小壁に櫛型の開口部が開けられ、ここに晒竹が挿入され、二階の階段上り口が望めるかたちに改造された（図6）。

茶の間は一〇畳の広さをもち、北側に縁をつける（図7）。根天井とする。中央に炬を設ける。庭側に一間幅の仏壇をつくりつけ、その下部には樺透漆塗仕上げで戸棚を入れる。またその横、庭向きに平書院を設けて、その上部には八角形の組み合わせからなる組子細工を入れる。杉柱の風化に対してこれら仏壇まわりの材は新しく、明治八年の改築時に現状のような近代和風の意匠を凝らしたと考えられる。

玄関の間から階段で二階へ上がることができる。二階は八畳と六畳の続き座敷となっている。梁を折り曲げて柱のホゾ穴を埋めつつ、勾配をもつ棹縁天井としており、元平屋建の梁上の空間を三尺程度上部に増築し、座敷の高さを確保する改造が施されている。北側にある八畳の座敷は杉皮付き丸太の床柱に、落掛に黒柿と銘木をもちいる（図9）。床脇は天袋付き、違棚および地板に樺一枚板を用いる。床および床脇の部分のみ、灰色の砂壁で仕上げられる。南側の六畳の座敷との境界には、竹に鳥をモチーフとした透彫の板で欄間を設けている（図10）。

六畳の座敷の南側には幅半間で収納部をつくり、中敷居を入れて、天袋・

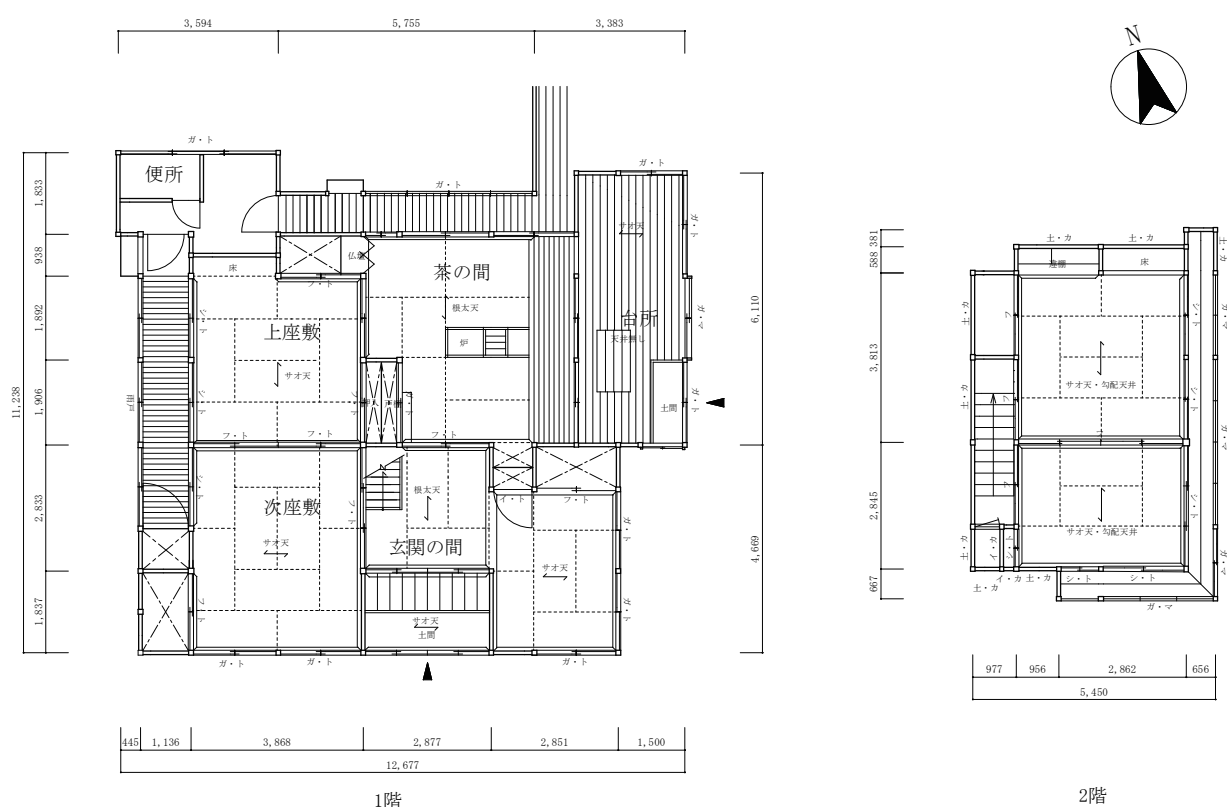


図4 高野長英旧宅平面図



図5 高野長英旧宅一階 座敷



図6 高野長英旧宅一階 座敷に開けられた楕形の開口部



图7 高野長英旧宅 常居



图8 高野長英旧宅 台所



図9 高野長英旧宅 二階の8畳の座敷



図10 高野長英旧宅 二階 続き座敷の欄間



図 11 高野長英旧宅 二階 6 畳の座敷

地袋の構成をもち、あたかも床脇のようにつくられる（図11）。その横には床はないものの、丸窓を開けて、竹をモチーフとした透かし彫り板が入れられる。その脇に平書院が設けられ、吹き寄せの棧とした障子を引き違いに入れ、その上部にやはり竹をあしらった透かし彫り板をはめる。六畳の座敷は床をもたないが、あたかも床の間に見立てたような室内意匠を凝らす。東側と南側の二面に幅二尺程の縁が設けられて、周囲をガラス戸で囲んでいる。以上のように明治に増築された二階は、装飾性を凝らした近代和風建築らしい室内意匠となっている。

（2）古稀庵

前述のように昭和六年（一九三二）、東北帝国大学建築技師もつとめた岡村潤治の設計により建てられた離れ座敷である。ただし単なる座敷棟ではなく、玄関とは別に勝手口をもち、意匠を凝らした水屋や便所、小座敷などの生活用の部屋群をもつ（図12）。

入母屋造棧瓦葺き妻入りの平屋建の続き座敷部分に、玄関・小座敷が入母屋造棧瓦葺きで張り出し、水屋と便所、勝手口といった裏方部分が寄棟造で続き座敷に対してL字型に張り出す構成をもつ。

玄関は西面し、銅板葺きの底が線形をつけた持ち送り・腕木で支持され、垂木と桁を杉皮付き丸太とするなど、繊細な外観をもつ。玄関入り口は吹き寄せの棧をもつガラス戸の引き違いとする。玄関を入ると幅二間奥行き一間半程度で広い土間となり、向かって左手に設けられた小座敷のガラス窓から意匠上の欄干が張り出し、下がり壁の錆竹留、正面に下地窓を見せるなど、数寄屋の意匠を凝らす（図13）。

玄関から廊下を介して、東西方向に一二畳と一〇畳の続き座敷となる（図14・15）。柱間一間の寸法は六尺である。南側に約四尺五寸幅の縁が化粧屋

根裏天井でつきその南側に庭門で区切られた庭園が整えられる。

一二畳の本座敷は北面中央寄りに床を設けて、左右に琵琶台と床脇を設ける。向かって右手の琵琶台上部には櫓一枚板の違い棚を入れ、その脇に付書院が設けられる。付書院には組子細工の障子四枚を入れ、上部は梅と鳥をモチーフとした透かし彫りの欄間、地袋には金砂子で加飾された襖を引き違いにに入れて、装飾性を高めている。さらに、その庭側（東）に栗ナグリを詰め打ちした簀の子縁が張り出す。

床柱は楓と推察され、落掛に檜柱、床框は黒漆塗、無目に煤竹を用いるなど銘木が多用される（図16）。床脇にも付書院と同様に、金泥・金砂子で飾られた天袋、地袋が設けられ、壁面は組子細工のガラス障子四枚を入れる。狹潜は縁形をつけて繰りぬかれ、葎が格子状に組まれる。座敷の周囲には猫間障子が囲み、室内から庭園を鑑賞できる構成とする。

一二畳の次座敷にも、右手の本座敷から連続するように床脇のしつらいが設けられる。地袋を設けて、壁面に組子細工のガラス障子を入れる。無目は煤竹が使われる。その左手は収納として襖二枚を入れる。廊下および縁の境は本座敷と同じく猫間障子とする。玄関から目につきやすい南西隅は半間壁とし、そこに下地窓を開けて、組子細工の掛障子をかけ、玄関まわりの内部意匠を凝らす王夫が施される。なお、次座敷には炉が設けられる。本座敷と次座敷とも棹縁天井とする。この境界には、鳥と松をモチーフとした彫刻欄間が入る。板の本座敷側隅に「越中 溪久平」の切銘が彫られる。富山県井波町の井波彫刻師・溪久平の作品と知られる。当時、井波欄間は寺社建築にとどまらず、住宅建築にも普及しはじめていた時代にあたる。

この続き座敷の廊下向かい側には、四畳の広さをもつ小座敷がある（図17）。半間幅で仏壇に類似する収納が設けられ、その一畳分の空間は落天井の網代組として、下がり壁に鍔竹留を用いる。その東面は雲板を入れて壁床のしつ

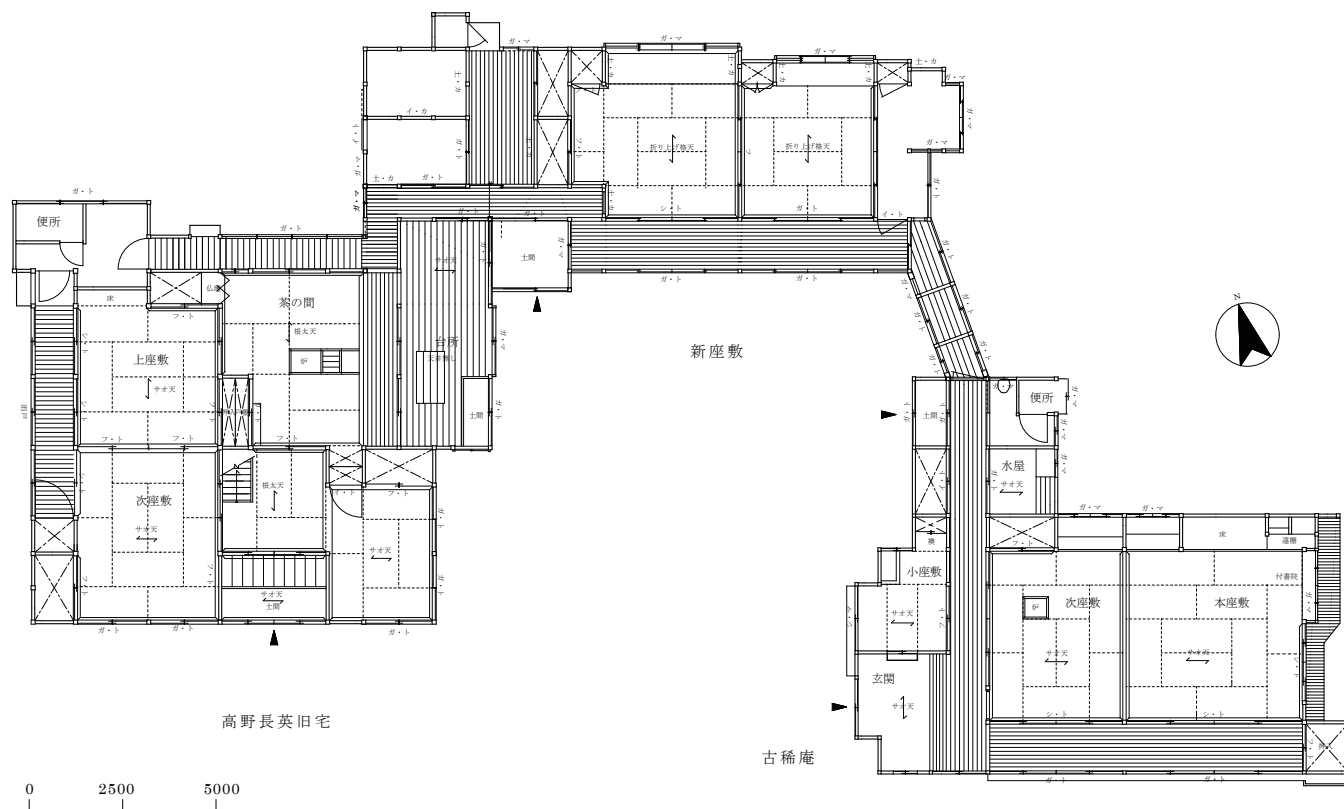


図12 旧高野家住宅 平面図

らいとする。また廊下との境界にたてられた襖は半月の中透かしを入れて、二枚合わせて円窓を表現し、その引手は月文字をモチーフとした桂離宮写しが用いられる。

さらに北側に廊下が伸び、その左手（西側）に勝手口、右手に手前から水屋、便所が続く。

まず勝手口の土間は叩きに玉石を菱形に並べ、ここでも装飾を凝らす。水屋は立ち流しの形式で、流し周囲の腰壁に小竹を並べる。棹縁天井の回縁と棹に皮付小丸太を配して、やはり数寄屋風を凝らす。隣接する便所も舟底天井として、棟木に杉皮付丸太、垂木に煤竹を吹き寄せに並べる等、水屋と便所とも一間四方の小さな空間ながら、材料と意匠を凝らす。

（3）新座敷

高野長英旧宅と古稀庵の間にたつ。前述のように昭和一六年（一九四一）頃に建築されたと考えられる。切妻造棧瓦葺き（庇は銅板葺き）平屋建である。ただし棟札が確認されず、設計者や由緒、その用途などは未詳である。

南側に廊下を設けて、東西方向に九畳半と八畳の続き座敷とする（図18）。現在、閉鎖されているものの続き座敷の西側には風呂・便所が設けられている。一間は古稀庵と同様に六尺で計画されている。

八畳の部屋は漆喰塗込による折上天井として、小壁には卍型の欄間ガラス障子を入れる（図19）。天井回縁より下は砂壁とする。廊下側は猫間障子として、続き座敷境には襖を入れる。襖の上部は菱形の幾何学的な組子を用いて、下部は裂をはり合わせる（図20）。北側に間口一間半、奥行半間で棚が設けられて、天板の下部をつくりつけの戸棚とする。天板上部の壁面には四枚のガラス戸（卍崩しの組子付き）を入れる。下がり壁によって目につきにくい、この棚部分のみ天井を格天井で変化させて、あたかも床の間のように



図13 古稀庵玄関内観

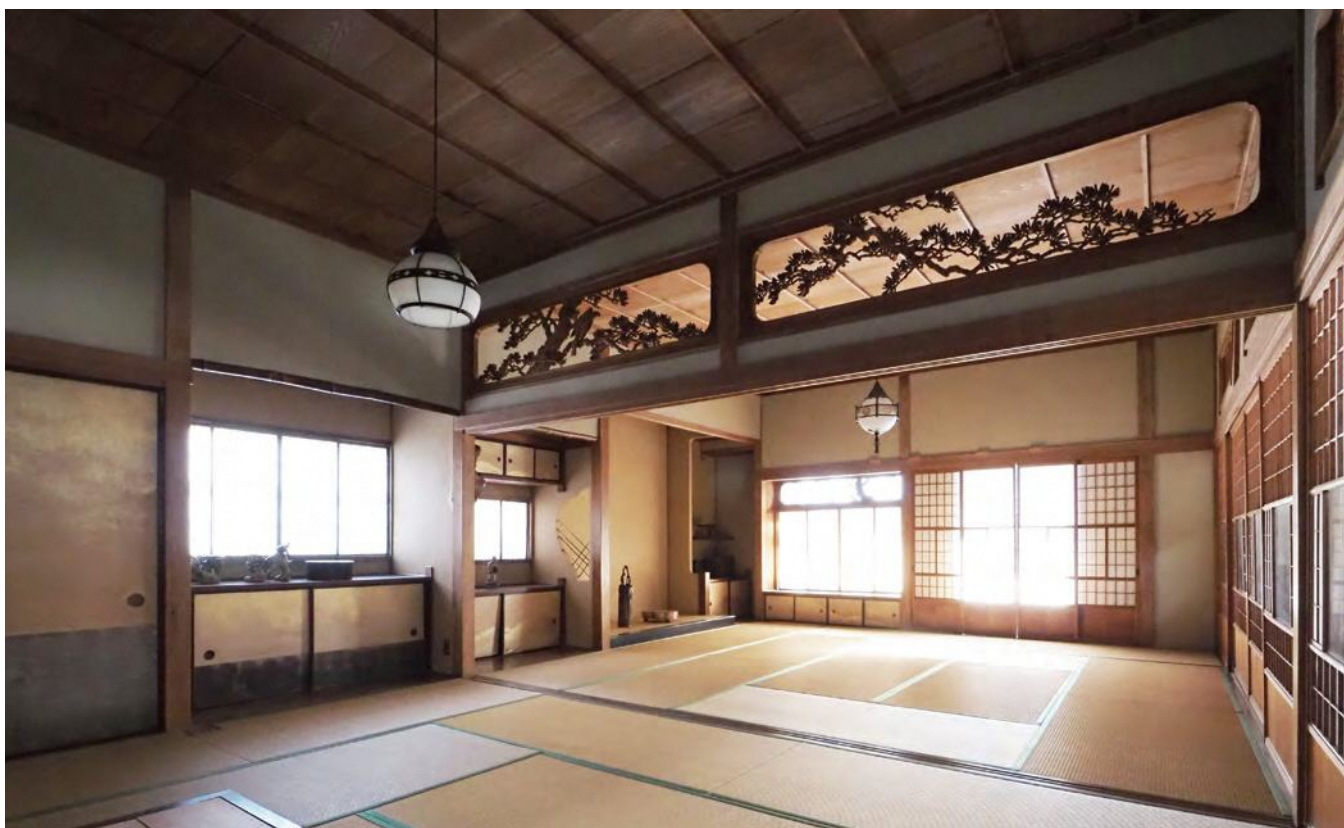


図 14 古稀庵 次座敷から本座敷をのぞむ



図 15 古稀庵 本座敷から次座敷をのぞむ



図 16 古稀庵 本座敷の床構え



図 17 古稀庵 小座敷



図 18 新座敷 外観



図 19 新座敷から廊下をのぞむ



図 20 新座敷（八畳の部屋）内観



図 21 新座敷（九畳半の部屋）内観



図 22 新座敷（九畳半の部屋）内観

な雰囲気をつくる。この左手は幅半間で上部は両開き（鏡付き）の収納、下部は戸棚とする。板は楓と思われ、取手に黒柿が用いられるなど銘木が多用される。

西側の九畳半の座敷は折上格天井とする。北側に幅二間奥行半間の踏込板部分があり、床の間風のつくりとなっている。その地板には檜一枚板が用いられ、右手に琵琶台がつくられる。天井もやはり、格縁を叩崩しに並べて、意匠を凝らす。西側には長一間半の杉皮付き丸太で留まる下がり壁があり、西側と北側の二面に押し入れがまわる（図22）。これに対して南側の壁面は、下部に風炉先窓のように摺ガラス障子二枚が入れられて、皮付き丸太・下がり壁の構成とあいまって、あたかも茶室の点前座に類似する意匠となっている。また廊下側の小壁に組子細工による欄間障子が入る。

新座敷には建具、欄間、天井等に幾何学的な組子が多用されて、造りつけ戸棚の壁面構成もあって、文人趣味の書斎のような雰囲気をもつ。こうした幾何学的構成の内観は隣接する重要文化財・旧高橋家住宅（明治一九年・一八八六から明治二三年・一八九〇に建設）に類似する意匠的な要素でもある。隣地ゆえに、あるいは旧高橋家住宅の影響を受けたのかもしれない。

（4）味噌小屋

味噌小屋は、旧高野家住宅の北西側、高野長英旧宅の北側に立地する。旧高野家住宅は重要文化財・旧高橋家住宅と隣り合い、この味噌小屋はその隣地境界付近にたつ（図23）。桁行三間、梁間一間の規模で、切妻造り棧瓦葺き、平屋建ての建物である。東側に袖塀が接続する（図24）。

内部は土間で、杉櫓が残存することから、本建物は味噌等の保管用倉庫として使われていたようである。小規模かつ簡素な小屋であるが、その南面の外観が特徴的である。



図 23 味噌小屋 外観

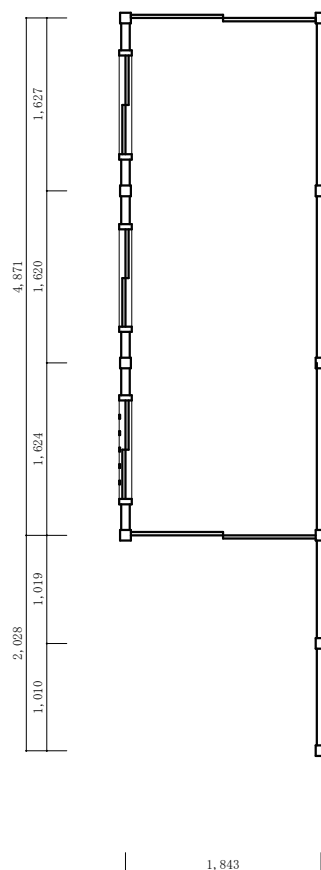


図 24 味噌小屋 平面図

すなわち、真壁の柱から繰形付きの持ち送りをせり出し、切妻造り屋根の南面は庇のように壁面が高くみえる形式にしている。その南面は各柱間に連子窓を開けて、引き違いの木製ガラス窓としている。腰には簾子下見板張りをまわす。側面の破風板をみると、南面の破風尻のみに繰形を刻む。倉庫の機能をもつ小屋でありながら、その南面の外観が意匠的に細部を凝らしている。

この特徴は、南に向かい合う高野長英旧宅との関係から施されたと推察される。味噌小屋は旧宅の「茶の間」から縁を介して向き合う建物である。その「茶の間」と縁との境界には、組子細工を凝らした平書院が設けられており、仏壇や囲炉裏をもつ「茶の間」でありながら、部屋から庭に向かう眺めが意識される座敷のような形式をもつ。こうした「茶の間」からの高橋家住宅との境界を画する眺望を意識し、小屋であるのにその南外観の細部が凝らされたと考えられる。

味噌小屋は梁間が六尺丁度の柱間寸法であるのに対して、桁行が柱間芯々五尺三寸五分と梁間と桁行で柱間寸法を異にしている。また東面と西面の出入り口のガラス戸の鴨居をみると、後補で柱へ指物を挿入して、飼物で調整していることなどを勘案すると、既存の小屋を切縮め、南側外観を整える改修が施されたものと考えられる。下見板張りに洋釘が用いられていること、梁間寸法が六尺丁度であること、また木製ガラス戸や連子窓もその改修時期に設置されたものと考え、その改修時期は昭和初期から中期の時期と考えられる。

(5) 瑞臯文庫

敷地の北西隅、重要文化財旧高橋家住宅との隣地境界付近に立地する昭和七年に新築された文庫である（巻末資料2）。高野長英ゆかりの歴史資料を

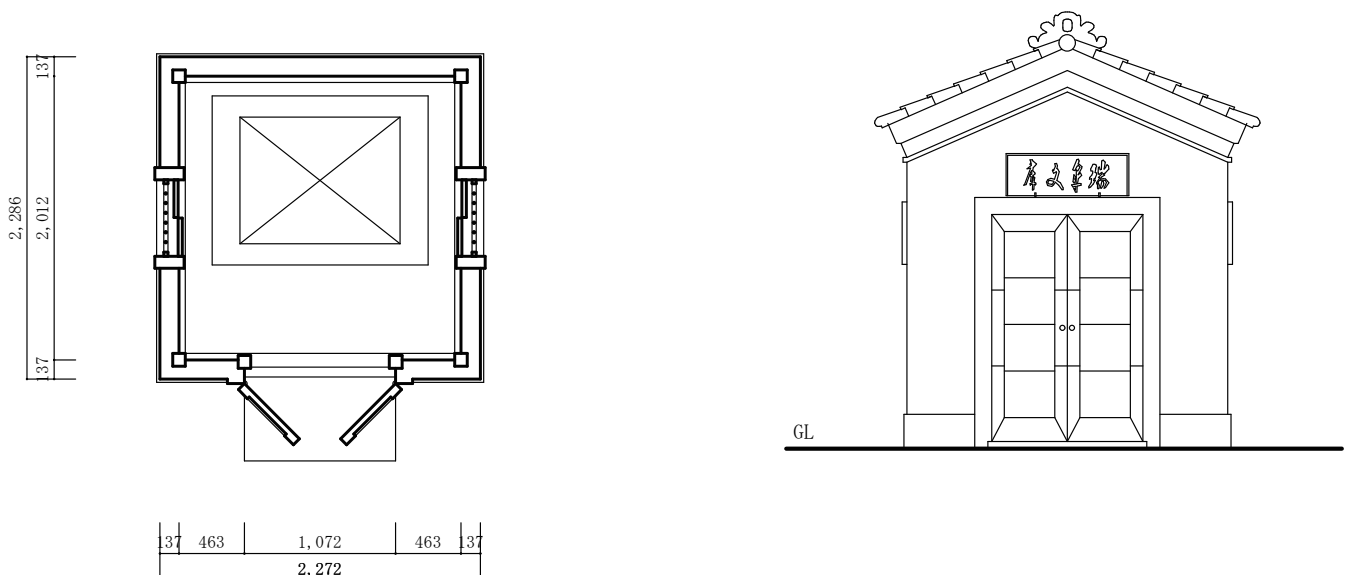


図 25 瑞臯文庫 平面・立面図



図 26 瑞臯文庫 外観



図 27 瑞臯文庫 内観および金庫



図 28 板倉 外観

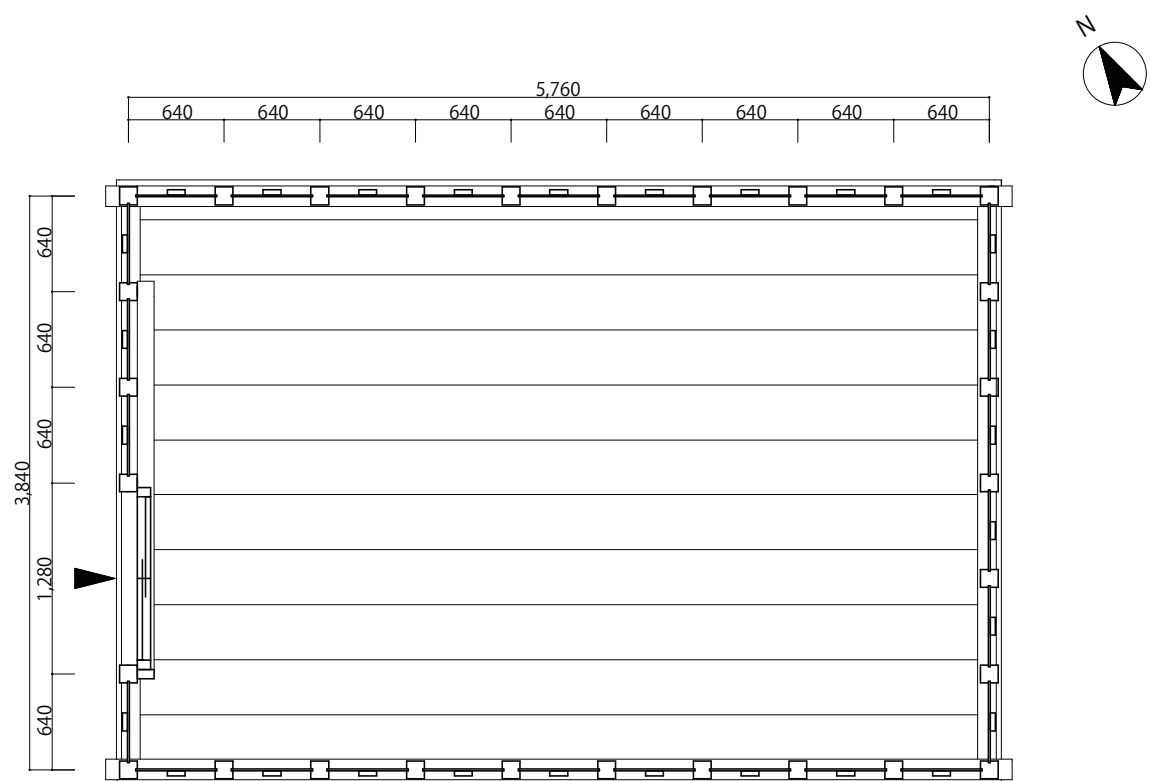


図 29 板倉 平面図

保管するための建築であり、意匠的には簡素で小規模ながら高野長運・長経親子の長英顕彰活動に密接に関わりをもつ建物といえよう。高野長英ゆかりの部屋として保存がはかられた座敷に近接する位置であり、「長英の間」との関係が意識されて配置された可能性もある。

文庫は南面し、切妻造棧瓦葺き・妻入り、間口・奥行ともに六尺五寸ほどの規模である(図25・26)。外観はモルタル塗りの大壁造り、正面に銅板張の観音扉をつけて、両側面に引違の板戸(外部に鉄格子付き)による小規模な開口部を開ける。室内の床はモルタル三和土の土間、上部に天井はなく、垂木・野地板をそのまませる。内壁は縦板張である(図27)。

内部には「S SAKUMA TOKYO」と彫刻された装飾錠をもつ金庫が設置され、ここに長英ゆかりの歴史資料が保管されていた。なお、現在それら資料群は高野長英記念館へ移管されて、そのうち五八点は重要文化財「高野長英関係資料」に指定されている。

正面の妻面、銅板扉の框上部に「瑞皐文庫」の扁額が掲げられる。高野長経の落款が刻印されており、長経の揮毫になるものである。上部の木口は風雨を避けるように板で銅板巻きとして、装飾的な扁額となっている。

(6) 板倉

敷地の北東隅に立地する。古稀庵の背面に位置し、正面を西に向ける。切妻造りトタン葺き、正面側に持ち送りを出して下屋庇を下げる(図28)。梁間二間、桁行三間の規模で、一間は柱間芯々で六尺三寸とする(図29)。一間を三つ割りして二尺一寸の位置に柱を配列し、その柱間に半柱を並べ、外観では一尺五分五厘間隔の繁柱の板倉である。柱間に横板をはめる。外観では、正面のみに床下部に木瓜型に練り抜いた羽目板を柱間に設置し、正面性が意識されている。ただし、この羽目板以外に、装飾的な要素は外観でみら

れない。

内部も一室で天井を張らずに、二重梁の木組がそのまま露出した簡素な構成で、折置組の形式としている。内外に和釘がみられず、かつ六尺三寸の計画寸法をもち、古稀庵・新座敷といった昭和初期の建物より部材の風化が進んでいることも勘案して、明治時代後期頃の建築と推察される。

3 建築家・岡村潤治について

これら旧高野家住宅のなかでも、近代和風建築として意匠を最も凝らす建物が古稀庵である。また古稀庵は棟札が現存し、昭和六年に岡村潤治の設計によるという、建築家の存在も判明する点も貴重といえよう(図30)。岡村は東北帝国大学建築技師をつとめていた人物であり、個人住宅を大工棟梁に加えて、建築家が手掛けている点でも珍しい事例である。

岡村は、近代日本の技術者養成を目指して明治二〇年に設立された工手学校(現在の工学院大学)造家学科の明治三五年(第二七回)卒業であり、東北帝国大学営繕課の技師をつとめていた。大正一二年の「仙臺建築會」名簿によれば、仙台の北三番丁に自宅をもち、東北帝国大学営繕課勤務であるが、昭和三年になると、仙台の荒町を自宅として、「市庁舎建築技師」の肩書に変わっている。昭和四年に完成する二代目の仙台市庁舎の建設に携わっていたと考えられる。この仙台市庁舎は当時の東北帝国大学営繕課・小倉強(昭和五年より仙台高等工業学校、昭和二五年より東北大学教授)が顧問として携わっており、その関係で岡村は仙台市庁舎建設に出向したのかもしれない(岡村潤治の経歴については斎藤広通氏のご教示による)。

また岡村の事蹟で注目されるのは、水沢の登録有形文化財・齋藤子爵水沢文庫の建設にも携わっていたことである。岡村の名は、その棟札で(昭和七年七月三〇日の上棟)、海軍建築技師・住木直二技師とともに「設計監督」

として記載されている。翻って昭和七年四月三〇日付で、齋藤實から水沢町長・後藤廣へあてられた書簡のなかでは、この頃、住木直二技師による設計が完成したこと、施工に大林組、監督に岡村潤治とする旨が記されており、齋藤實自身の指名により、現場監督が岡村に託された様子がうかがえる。また昭和一〇年に実施された増築工事においても、工事関係帳簿の宛先が岡村潤治となっており、引き続き、岡村潤治が齋藤子爵水沢文庫増改築の現場監督の任に当たっていたことがうかがえる。

このように、岡村潤治は東北帝国大学営繕課のち、仙台市庁舎建築技師として昭和五年頃まで活動し、その後に昭和六年、この旧高野家住宅の古稀庵の設計を行い、昭和七年以降も齋藤子爵水沢文庫の現場監督として水沢で仕事をしていた様子が確認される。

なお、昭和八年の高野長英旧宅の史跡指定の申請に際して、詳細な平面図・矩計図が添付資料に青焼図面として作成されている。大工の図法とは異なる近代的な製図による実測図面であり、この作図にも岡村潤治が携わった可能性も考えられる。



図 30 古稀庵の棟札